

学部優秀部門奨励金

(知能情報学部 2021年3月卒業)

「私の定義」

4年間の学生生活で、私は「隙間時間を活用すること」と「小さな努力を継続すること」を行う習慣を身に付けた。勉強と休憩の切り替えだけでなく、あらかじめ決めた時間や場所で、勉強の内容を切り替えることで、日頃の時間に対する意識を高め、自らの時間を管理する工夫をした。例えば、2時間弱の通学時間において半分以上を占める電車での移動時間では、往路でその日の講義内容の予習と復習を行い、復路で講義以外の勉強を行った。隙間時間の活用と小さな努力の継続によって、日々の中で小さな成長を積み重ねることができた。成績優秀者としての表彰と特待生の採用に必要な成績を維持しながら、基本情報・応用情報技術者試験の合格と初受験の TOEIC 公開テストで 800 点を超えるという、掲げていた目標を達成することができた。

学生生活の初期の頃と比べて、考え方そのものが変化した。私は以前、何事にも答えを追い求め、何かを選択した後には後悔ばかりしていた。どう行動しなければならないといった答えがあり、答え通りの生き方をすべきだと考え、何かを選択した際には、いつも自らの選択より、他の選択をした方がより良い「今」を生きることができていたのではないかと後悔していた。しかし、葛藤を抱えながらも、一步一步着実に前に進んでいくなかで、選択自体に良し悪しなどなく、選択した後にどう行動するかで、自らの選択が良いものにも悪いものにもなり得るということ、さらに、正解は探すのではなく、自らでつくるものだと、自ずと考えるようになった。考え方の変化によって、ありのままの自分や物事を受け入れることができるようになり、人としてまた 1 つ成長できたと感じる。勉強に関する目標の達成や良い結果を残せたことは、確かな成果であるが、自らの内面の変化や成長もまた、私にとっての大切な成果であると実感している。

得られたことが多い学生生活だったが、得たことというのは、次に活かすことに意義があるため、大学を卒業した後の行動次第で、4年間の学生生活の価値が変わることになる。大学卒業後の最初の活躍できる場は大学院であり、私が得てきたことを活かし、成長の証を示すことができる絶好の場所である。大学院で活躍するために、達成したい目標を設定する必要がある。目標として、まずは、今まで熱心に取り組んできた英語を活かし、英語の論文を読む量や速度、内容の吸収力といった面を他の学生に負けない私の強みの 1 つにする。研究活動での目標は、国内の学会発表で表彰されることと国際学会での発表に挑戦することである。大学院では「得る」だけでなく「培う」ことにも意識して力を注ぎ、社会人になったときに活かせる素養と教養を身に付ける。そして、いつでも歩んだ人生をありのまま受け入れて、生まれたこと、生きていること、人生のすべてのことに対して「ありがとう」と感謝することを欠かさない一生を送る。